懲狂人

下

ホ 2
29
2

木波2
20
巻2

懲狂人下巻

平朝臣玄道謹述　門人　上野國　村上鎌太郎　仝
豐前國　田口水足　校

△開題記云。但シソノ書ル物ハ。何物ナリケム。筆ハ何狀ニ造リタリケム。ト云コトマデハイマダ得考ヘズ。皇國ニテ紙ヲ作リシ事ハ。推古天皇十八年。僧曇徴ト云ル人。高麗ヨリ來リテ。彩色及紙墨ヲ作ルト云フ見エタレド。ソレヨリ二百年バカリ以前。履中天皇ノ御世ニ。諸國ニ史ヲ置テ。言事ヲ記ストアレバ。既ク紙墨モ筆モ在シナルベシ。ソハ書籍渡リ來リシ上ハ。必ナクテハエアラヌ

物ナレハナリ。サルハ。唐ノ代日本国。松皮紙ヲ出ストアル。唐ノ代ノイツノ比欤。漢ニテモ樹膚及故帛。魚網麻繒等ニテ作リシ由ナレバ。皇國モナラヒテ作リシナルベシ。筆モ姓氏録ニ。筆氏。燕ノ相國。衛漏公之後也。善作筆。預于十一流。因茲賜筆姓トアリ。サレバ何モ書籍渡來シ後ノ一ナルベシ。神世ニハ決テナキ物ゝ考ヘ得ザルハ本ヨリナキ物ナレバゝ。サルヲ□○ノ形ヲシルシ、物ナラムト云ル。紙墨ナキ世ニ。何ヲ以テ何ニ書ベキゾ。小刀ノ鋒針ノサキニテモ。便利ニカキ得ルヿ難シ。況テ神代ノ書風トテ雲烟ノ如クカキシ由イヘル。筆ナクテ。何ニテ書得ベキ。出雲國ニ筆艸ト云テ。能物ヲ書ベキヨシイヘル空言ナリ。出雲大社神官。中村文大夫ヨリ。彼筆草得シヿアリ。筆ノ形ニ似タルノミニテ。麗シキ文字ヲ書ベキ物ニ非ズ。文字カクヿヲノミ云テ。何ヲ以テ。何ニ書シト云考ヘナクテハ。狐火ノ如ク。紙燭モ折松モナキ火ヲ云ガ如シ。可笑。サテ歌祝詞ナドノミヲ書テ。ソレニ付タ物語ハ。人々記臆シテ語リ傳ヘシナラムトノ説モ如何ゝ。今モ肝要事ノミヲ記シテ。夫ニ付タルヿハ。覺エ居テ語ルヿモアレド。古ノ帝記。家々ノ記録ドモ。ミナ肝要事ナレバ凡ジルシテ。覺エ居ル類ニ非ズ。神ノ御名。人ノ

名ナド。古傳一ヤウナラズ。古事記。日本紀。其外サマ〳〵
イヒ傳ヘシヲ思フベシ。神ノ御名ナド。本ヨリ神世字ニ
カキトヾメ有ベキヲ。サマ〳〵ニ傳ヘシモアルハイカ
ニ。欽明天皇ノ紀ノ注文ニ。帝王本紀。多有古字。撰集之人。
屢經寫易。後人習讀。以意刊改。傳寫既多。遂致舛雜。前後失
次。兄弟參差。今則考覈古今。歸其眞正。一往難識者。且依一
撰。而注詳其異。他皆效此。トアル古字ヲ神世字ト云ル僻
事ナルベシ。古キ書体ニ。今モ見エタル亥ヲ亥殺ヲ敍。料
ヲ斛。寵ヲ寵。多クウカウムリヲ。穴カウムリニ書リ。鼎ヲ斟トヤウニ書ル。古
筆ニ見エタリ。古ヘトテ。仁德天皇。履中天皇ノ頃ニ書シ

物ヲ。三百年四百年後ニ見テハ。字体異ヤウニ見ユルモ
有シナルベシ。漢ニテモ。モトヨリ古字トテ。異ヤウナル
形ノ字アルニ准ヘテ思フベシ。サルヲ古字ノ和字トサ
ヘイヘバ。神世ノ字ト定メ云非コトナルベシ。カノ和字
ト云ルハ。漢字ヲ假リ用フルヲ云ル。骨ヲ穗根ト書ル
ヲ和字ト云ルニテ辨フベシ。
○今辨云。右ヨ舉とる師說ム。前說ふて。後ヨハ日文傳末條
了。信友說を採て。委く說きされバ。此吸々ム無用おとふり。
まさ先師の遺書ヨ。信友說ム。慶長十二年。十二月。武州浦和
玉藏院看海僧正云。上宮太子の御時まで。日本ヨ墨なしな
べて木脂を取練て。物を書けり。膠ム唐國より渡るを用ひ
て。ぞりゝれバ。小野妹子大臣を。漢國へ御使ヨ遣ム為賜

へる時膠を製する人を請伴ひて飯朝し給
矛りと慶長比よ書さ添物よ見ゆとあり。　かれ筆草む。土
佐國ふも豐前國まさ他國ふも生ふや聞たり。角田主の説
記なる外宮御鎮座條よ字賀魂神土祖神太田命山田原地
護神定祝奉也とある下れ注よ太田命靈銘石坐也と見い
天地麗氣記よも此社條ふ有神寶名石一面日象扇一枚や
ある名石まさ銘石とハ神字ふて神名を記せる古代の神
宝と聞い日象扇や云ふも由有げゝと云きつ添よ因て故
ら〳〵案ふふ大神貫道ゞ磯馭盧島日記よ彼島ゞ產盥釜
杓子ふどいふ世帶道具の形皆自然石ゞ具るといひ常盤
草よも石紋ゞ自ら人物花鳥れ象有て彫るゞ如く繪くゞ
如く玲瓏と〳〵て愛ちつべしと見ゆまさ西國よもかゝる
地ゆりと或者ふ聞けるハ實ゞやさて世ふ石筆石墨とい
ふゞ有て山城國山科の牛尾南都れ春日山紀伊の若山加
賀白山よも出て文字石といふも多く有由ふて雲根志よ
宝曆十三年長門國よ產る石面ゞ○の文字ゆりを鮮ふ
る事新ゞ筆るゞ如きを得たり又或人云石を破て田字ふ
見ゆり一片ハ右文字一片ハ左文字ふり又長崎人來て一
石を出ゆ白石よして大吉といふ赤文現る又近江國相生

谷よて白石黃文の天字ある石を得さり。まさ浪華の纂葭
堂讃岐の象頭山よて拾る梵字ゆる石を藏む紫石白文ふ
り人作よあらず天工の物ふり。まさ出雲國松江の常教寺
よ出現石といふ什物あり濱手御崎といふ地よて土民畑
ゆり堀出せり大さ鞠より稍小く長ゆり色黃赤く圈ふ
る美石ふり竪ゞ筋ゆり他石もて扣む二よ破れて兩方よ
黑く妙法の二字あり又大和國奈良より泊瀨ゞ通る以屋
川ちふ所よ梵字石と大文字石の兩石あり大よして文字
鮮明ふり奥州二本松高越村の山上ゞ一文字石あり大石
れり文鮮ゞ見る又下總國銚子口といふ町よ一石ゞ假字
一字づゝある小石稀よ有江戸深川の人三十一品の石を
拾集ゆて古歌一首と成し珍藏ゆどいひ其餘種々の形
象ある石の事をも記せり。まさ升がさ乎氣の石ハ播磨風
土記よ見ゆ又鉄石碁盤石海鉄砲餅石庖丁魚筋石薑擦石
等を始ゆ種々の象形ある石をも雲根志よ記せり信濃國
ふる鯉巖烏帽子巖兜巖。まさふる板岩硯岩釜岩屏風岩陸
奥國ふる材木巖と云地よ柱梁折板の如き者數万片ゆり
茆蓋貫材角柱上鴨居れどの目見ゆ竹島ちふよハ茶竈几
皿水器盤盂等の象あり。と物等よ云ひ田中翁の説ゞ薩摩
國霧島山よも文字石ゆりとぞ尚ゆゝる物類ハ諸國よゞ

と多うるを今思出るのこを舉さるなり中ゝも妖魅の変現と見もるもあれど多くハ神造ゝて此の島の故事ゝ考合もるゝを恐くめ世始ま成賜ひし天皇祖神の瀧てかゝる象物を顯置うせ賜ひて謂ゆる氣運の至るを待ち其心を啓きて各其々の器物をも創出して世の利用と為べく思かしおもて定て其本を示賜むとての神御量あらむと思奉らるゝいと辱おく此の筆草石草なども其片もしゝて此の名石と聞あるも神石ゝ自ゝ神名を現むし給へるゝやとさへ古代の八幡宮の神石ゝも思合されておがろげの由ゝむあらドを例の下士の輩も此を聞バ決色て大笑をもらむとぞ菊居隨筆ゝ攝州見塩の産瓢簞紋石瓢のなりさる形石中ゝ摸様あり筑前の或山岸ゝ甲冑武器の形あり又同鹿の島と欤ゝ唐人の体とあれども神代の体欤関本ゝて多石もなりり此唐人の体とあれども神代の体欤関本ゝて多葉粉盆ゝきせる迄揃へさる紋石出さり煙草盆などハ近世の物ゝ然ゝ後世如此物出るとて天然と昔より造化のおを所ならむ出羽の佛紋石ゝ佛像をさらぬ前ゝも出來さるべし如何ある感ゝて出來さるゝや甲州の産菊紋石中ゝ菊花の紋花葉とも鮮れり各塩産のひやまうさむ石のぢとしと云るハ期ちびも右攷ゝ待へり。ま

さ夫ゝ付さる物語ハ云々此論ハ文字おき論ゝ説まど却て上代ゝも文字有りし徴とさを云べけれ古傳一様あらば云々と云れど。そハ漢文字を書く御代と成てさへゝ聖德太子ゝ薨日をも御紀ゝも推古天皇廿九辛巳年二月癸巳五日扶桑畧記ゝ廿二日とし御紀ゝハ七十五と記され扶桑畧記ゝハ七十三崩一云七十一云八十五といひ水鏡皇年代畧記ゝ七十三とし神皇正統記ゝハ七十歳。とし。まさ天壽圖曼陀羅銘ゝハ三十壬午年正月廿二日と云ひ法王帝説ゝハ二月廿二日夜半とし天智天皇を一説ゝハ天上ゝ昇賜ふと傳へ弘文天皇ゝ御即位ゝ有無とふ事をさへゝ世ゝ混らし。まさ年號も大化以前ゝ法興端政ちふ。推古天

皇は御代ゝ在しと物ゝ見ゆ。白鳳朱鳥などいふも。或は孝
徳天皇御世在ぱとも。或は天智天皇御宇とも。天武天皇御
世とも傳へて。一定せぬ。天武天皇元年も。或ハ壬申とし。或
は癸酉とせり。後ゝ南朝は皇胤の御事ゝ詳ならぬ
中ゝも。長慶天皇は御兄弟は前後も。御即位は有否も。今分
明ならざるを論者は何とか謂ふらむ。又鎮西八郎及平
源義經和田義秀ゝ異國ゝ至れる。又平清盛公宗純和尚足
利義尚ぬ。豊臣関白の皇胤とする。秀頼公は事實源家康公
の家系。さてハ関原大阪軍等は始末さへゝ諸説紛紜とし
て審ゝし難きを。文字ある代ゝをらかゝるをば。論者何と
か見るらむ。神御名などハ。種々は異なるも坐せど。諸氏の
氏文。ゝ々の家牒は類ゝ神字もて書。傳さるを。今代ゝ
めでさくハ。傳來ゝなれまゝ文字も有つゝも。古人ハ。記誦
を重ゝつるゝとハ。上代ハ更ゝて。漢土も天竺を然ありし

ゝと。師説を本ゝ取て。記せる物あり。因ゝ云。吾妻鏡建暦二
年八月記ゝ伊賀朝光和田義盛可候北面三間所之由云々
件前人雖爲前老被聞召古物語所被加之也。まゝ三年二
月服近祇候人中撰藝能之輩被続番各當番日者不去御學
問所令參候面々隨時御要和漢古事可語申之由とあるを
右大臣實朝公ある。万葉集など好れゝるを按ふ。そも
古風を偲むしての所爲ゝやゝぞ覺ゆ。まゝ論中引る帝
王本紀とハ。決て古書ゝて。古代ゝ大神宮本記などを始め
て。某本紀ゝ云ゞ多かりし事も。天道掛立ゝ云ぱ。はゝ古き書体ゝ。今も云々とある
を天竺は談ゝ。一水四見とて。水はへゝ見者ゝ因て。種々ゝ
異ありと云る如く。かゝ体盲者ゝをさもあるべくゝそ。
ち縁れき衆生は度ゞゝ如をいのぶせむ。異躰は字ハ。新撰字鏡千禄字書龍
龕手鑑などゝ見匝て。何くれと論へる人多きゝ。
論者の己獨知りゝ揚詞をるぞいゝをゝある。

△開題記云。神世ノ字ノハカナゲナルヲ耻ラヒテ。有ト

云ハザル僻心ニナモ有ケル。漢人ニ對シテハ。耻ルフモ
アラン欤我皇国ニ元來傳ヘ來タラム文字ヲ。誰ニ耻テ
有ト云ハヌフノアルベキ。又云。神代ヨリ有來シ文字ハ。
象形ト假字ナルヲ。象形ノ字ハ限リナキ事物象ヲ畫ク
態ナル故ニ煩ハレク。假字バカリハ。古事記序ニ。以音連
者事趣更長ト云ル如ク。書籍ノイト長クナリテ。勞モ多
カル故ニ。靈チハフ。神ノ御心ト。漢國人ノサカシダテル
ニ。一字ノ上ニ義アル。彼國文ヲ製レメ玉ヒ。ソノヨク調
ヘルホドニ。貢奉ラレメテ。大御國ノ要ト爲玉ヘルニナ
モ有ケル。先日文トカ云文字ヲ。假名ト云ルフ如何。假字

ハ漢字ノ字義ヲオキテ。コノ國ノ言ニ假リ用フル故ニ。
假リ字ト云。皆人意得タルガ如シ。日文ヲ假字トイハバ。
梵字モ蠣文字モミナ假字ナリ。象形ノ字ト云モ。六書ノ
一ツニテ。コレノミニテ。萬ノ事ヲ記スベキニ非ズ。サルヲ
只假字ト象形ニテ。ソノ象形ヲ限リナキ事物ノ象ヲ畫
クト云ル。象チアルモノヲ盡クカクコトハ。漢字ニモナ
シ。古事記ノ序文ノ以音連者ト云ルハ。全ク漢字ノ音ヲ
以テ。阿兎都知トヤウニ記シテハ。長クナリテ。煩ハレキ
ヘ。今ノ世ノ如クイロハ假字出來テ後ハ。數百万言物語
書ニテモタヤスク書モ讀モスベシ。往昔ノ假字ハ。古事

記。日本紀ノ歌ヲ記セル。コレ古ノ假字ニ。歌一首記スモ。
手間勞コヨナシ。万葉集ノ書ヤウ。サマ〳〵ニ短ク書ル
モアレド。ソハテニヲハナド讀人ノ心ニ。辨ヘテワケテ
ヨムベキヿ甚ムツカシ。漢人ニ義アル文字ヲツクラシ
メテ御國ノ要トセム。神ノ御心ニトノ思ヒヤリ。アタレ
リトヤ。オボツカナシ。又云。漢文ニ書取ガタキ事ヲバ。如
屎醉而吐散登許曾。ナドヤウニ。漢文ト假字書ト打交ヘ
モシテ記シタリトゾ所思タル。コノ書ザマヲ漢文ニ書
取ガタキ故トオモヘル。甚シキアヤマリニ。コノ假字交
リノ書樣ゾ古言ヲ存セム爲ニカヤウニ記セルナルヲ。

漢文ニ書取ガタキユエトハ大ナル思ヒ違ヒナリ。サテ假
名本ヲ。今ノ日本紀ヨリモ舊シトイヒ。古事記ヨリモ古
ビテ書ルフミナリト云ル。甚如何。マヅ薄靡ヲタナビキ
テトモ。カスミナビキテトモアルヨシ云リ。淹滯ヲシヅ
ミトモリテト注セリトアル。コレモ多奈毗伎豆。志豆美
止毛利豆ナド有ケムヲ。釋ニ引トテ。片假字ニ書ル物ナ
リト云ル。甚無稽ノ說ナリ。モトヨリ此トコロノ文ハ。日
本紀撰ノ時。古傳ニナキ事ヲ。漢メカシ物々シク。理ヒ深
ゲニ記シ添タルナルヲ。今ノ日本紀以前ニコノ文ノア
ルベキイハレナシ。ソノウヘ假名ガキニシレルシテハ。漢

文ヲ取用ヒタル詮ナク。サル拙キフアルベキニ非ス。猶
イハヾ釋ニ。含牙。案假名本。全云葦牙。故存其文。猶讀葦牙
也。トアルハ。釋ノ論ノ如ク。キザシヲ含メリト訓ベキ事。
論ナキヲ。アシカビヲフクメリト假名本ニアル由。イフ
ニ足ヌ非ヨミナリ。又草野姫假名本ニ。クサノヒメ止讀
之トアリ。コレラヲ思ヘバ。世ニ云カナヅケセルヲ假字
本ト云ルカトモ聞ユ。クサノヒメト訓コト。全ク草ノ字
ヲ訓ヒガメタルヽ。又有至臣假名本作内臣トモアリ。コ
レハ日本紀。カヘリテ假字ヲカキ。カナ本。文字ニカケリ。
又毬甃假名本ニ作織氈ナドモアリ。コレラウチノオミ

トヨミ。オリカモト訓ベキフ。文字ニカケル故。又田戸假
名本作田部之戸也トモアリ。又弥移居国本作三宅国ト
アルハ。假名本カ不詳。又爲與之假名本作令返與之トモ
アリ。爲與之ヲカヘシアタフト今本ニ訓リ。又道君假名
本越郡司道君トアルヨシイヘリ。假字本ノ事猶ヨク考
フベシ。開題記ニ云ル說ハ。信用シガタシ。
○今辨云。ハ條ヲおとゝいと迂遠き說ふゞら。今姑く此
ヨ付て論ず。おも韓をぎし賜ふ。漢神ハ御心と。昔人ハ異国
魂ふはを成行きて。身を御国ゑ居ゑくも。心をゆくゞきて。
異国ゑ移りさまをゝ居しよゑ。物を書記をおも。主客ハ別

をも分ぬが多く見え世の漢學びをする者ハ漢國を戀び佛
奴を天竺を戀忍びし事當時ハ書を見てぞ知らるゝさ
ぞ非心をアを万愧べき理ゆきをも愧ぶかハ梵字めハ
さる文字ハ有アと云ざぞもさるべハ勢あるを論者を常
理字知て權變を通らぬ説といふをくさそまさ日文を假
字ゝ云を云ゝ此説の如く皆假字ゆるさと論ふまでもか
しされと古代ハ他國ハ字をカナと云る例を見當らぬを
思へむ上を舉さる如く神字といふ義を含み多ぞ故ハや
有けむ奈とハ成まさ鳴あどハ義をり起れる由師説の如
きを或説ハさを本を添ふよアを負る称をとて名と
を實をそひ字とハ辞ゆるそひ魚菜ともを飯を本をし酒を
本とせる称をて サカナといふも此義ありとも云りさも

あるべ象形ハ字と云も六書ハ一をて万事を記をべきハ
くや 非ゞと云れゞ大らゝ唐國の六書といふも象形ゞ本をて
指事會意をかゝもちゆべく轉注を假借ちふハ諸聲ハ象形假名を
兼さる如く此二を大らゝ含有アとも云べゝれゞ此神字ゆる象形
ゞ借名とをて有ゆる万物万事を記をを大らゝ足ぬ事
あるまゞき理ありらしさるを象ある物を盡く書ゝとを
漢字ハもあしと云を先師の象形ハ字を限ゆき事物ハ象
を畫く態れる故ハ煩ををく云々と云れしを難をしあき
ど此ハ彼詞もて意を害ふ所爲ハ尤々ををて天地ゆ有ゆ
ハ万物を盡ゆ象成さる字ありゆ云きしをを非ざるをや

よく本文を味ひて知べきなり。そも漢國は字を用させ賜へるを。此は師説は如くそれ備れる程の貢奉しをて。大御國の要と爲給へるまと。鈴屋翁も。文字め御國はひとつ御名ゐらぬ詠きて。神代より須賀大神の。漢國々の金銀ぬぎは諸物をも。遍く採用ひさせ賜をむとして。浮寶を作らせ賜ふる幽契の原きて。神代よも夙く大神は御子多ちの。ちゐ諸國より諸物を採用むけせ給ひし事有ちを。更ふも申さば。人代と成てを。冲哀天皇御代の。現世ふ現はきとる由。師翁等は説著されしゐても實けふ。ひとりしと測知るゝを。此一を以て万事ふ測知るべく。淳朴ふ語傳へさる。神語のなむあをは。古とふ漢字も。實を固作坐大神の。神

御量の作始賜へる物ふれば。此を皇國ふ採用坐るも。この此やを隈ぢふ隱ぢて。侍ひれむとも。御自詔賜ひ。神功皇太后は御歌の。常世のいはを。いを立ぬ。少御神の。神ふぎ。ふだもとわし。豐壽ぎ。ふ知くるふく。貢り來し御酒ぞと歌ひ賜へる。御故事ふ因て。靈は御柱。まと印度藏志等ふも。委く説明ふ坐るぐ如くふまぎ。苟も天皇祖神の大道を執行て。道紀とをは上士を。聊も惑ふべき隈ハ非じとぞ思ふ。そハ已ふ或人も論る如く。皇國を。譬バ京師の如く。外國を。四方は。あふり有ふ似さり。百穀を始を珍物も四方ちり取作りて。貢物ふ奉りもし。轉運をる者は有。だ古を。京師人も安居をれ。此ふ。ぬくだ立ぐさく。邊鄙の人も。此ふ待て。活計を立ると。全じ心ぢへふ。又外國ふて。うめをを。考つけ。巧み出せる古とを。皇國は人を。居ふぐらふ。此を受予。今日の資用とも

るまと皇国の万国よりぐれこる所こ又君上ハ耕賜たば織給たばして稲穀りあき錦繡を身よまとひ給ふよ非ず
や と云る如し神代をり深ち由緒ある事をバ論者等ゞ夢
よも知ぬ所り非ず らし さて仙境異聞等り先師ち集給へ
る神字を或神人の看行ちをいとをく集らきこるを此ふ
を異体字三字を拾ひ遺されこりや宣へりとぞまこけき
ふ故あをて幽境ち神詰を承ちきる中よ神字を世よ遍く
用ふるあとを禁戒なきど神名などを記そ古やハ妨れし
と宣ひ又世よおがつこのれき山陵ち御在所をも問奉ゐを
り そを幽境り在れぞ尋ばやも有ぬべしと宣しとぞ此よ
因て熟按ふふ上代をり天朝まこ諸神社ゐゞり傳來つる
古き神宝物や図書等の類ち兵火盗賊れど ち禍難ふ罹り
て泯逸せぬるがいと多く文よむぶとよ あらば口をしく
なげき思へぬをそきをこ実ハさるべち由ありて幽界ふ
取収をさせ賜へるまらむと推量らぬ微のあをゐさて
を神字をも皇大神等ち御量ゞ漢字をもて夫よ代へ用
ハををそ世ふを遍く知らし色賜をぬ事と定坐るふて
元をゐさる契あぬ事れるべし御陵等をも人力の及ぶ限り
は索奉るべきもゐよ臣子のえさらぬ道ふをぬきどそを
世り聞ゐぬ才子等ち勤み仕奉るゞ多かれバ已は除力る

く且ハ右故り因て強ちふ索求奉らむともせぬ字かみの
くりつぶやく徒のあゐと聞ゐるを辨へゞてらよゐむさ
てを師翁ち神字ち辨ハ徒事よやと疑ふ者もありなをを
ばや〳〵然らば此ち神字の有无ち論をいと大事ふ関係
る論ふて もと天皇祖神ち大御口ゐゞら御傳させ賜へる
天津祝詞の太祝詞を申をも更ふて其御子神千五百柱と
多り坐しゝる皇神等の天降り來ましい時り天上をり神
字もて各某くよ天地ち出來しよゐ人民の初て成立しき
とらをを ゐ故ぶさり記し傳坐て在來し物ぞ謂ゆる諸家の
齎る所ち帝紀まこ本辞よを此やゞて古事記及假名日本
記ち本書と成きるをとりて此ぞ皇国よ正き古道ち傳來
きふ所以なれバ此を輕瑣の事とをおもひをぐしをを
はこ漢文ふ書取が多き事をぞ云〻古を例ち譫言の中ふ
も殊り甚き妄言ゐゐそを漢文ふ書取ゞこ旨を種々り
勞苦きし事を彼序よ見西て已よ云ゞ如しぢて漢文よ書取ゞゐ
きを強て書バ蠟を嚙ゞ如き詞と爲て事情を害ふをと鈴

屋翁は紀文を評せられしが如くおきむ。かく文句は体ゐ
勞れさるハ。古語を損そむとは爲れるを。古語を損じと務
をらきゐふを。勅語を鄭重をましゝそぐれていそゐき眞
心ふて。云も亨往バ。一ゐ飯るを甚おき誤りとも。思違とし
も云へるを。いうゐる狂惑心れらむ。漢國の昔ゐ。臧三耳。堅白
異同の辨ゐどいふ類ふて。己酒ゐ醉ひ故ゝも。酒を飲まじ
ををまひ。物を持て人を毆傷おがらも。我が傷毀しゐハあ
らゑ。手は過れ。といふゐ類て。のれ己等ゑ愚き心ゐを
渾てえ心得がてぬゐりゝ。また假名本を今は日本紀よ
りも舊しといひ云ゝ。此ゐを假名本は事とせるゑ。師説ハ

實ゐかくは如きを。初條ゐを。今は日本紀ゑ古事記と全体
ふ記せりとを。いうれる僻言ぞを云へるハ。論者寃を先師ふ
負せ故をいふべし。此ハ上ゐもまゝ此所は文を。日本紀撰
は時古傳ゐれき事を云ゝ。此も鈴屋翁の説ゐて。珍げおき
上ゐ。己く私記ゐも。此之溟涬而含牙也。即是春秋緯文也と
も。此序文自清陽者已下。至地後定。皆是淮南子天文訓之文
也。ふどあれゑも。古史傳。まゝ赤縣太古傳等ふ委く説賜へ
ふ如く。全く古傳れき妄事を杜撰て。載賜へるゐもあらで。
我古ふもさる傳は有しを取て。記給ゐるふて。我彼全傳の
故ゐるゑ。頓ぶふゐて彼文ふはゑ因賜ふと云を。思量は足ち

るよて。此首段は傳を。上代ゐも。漢土玄家ゐを。儒家及天竺
ても。皆全傳ふて。いと奇びゐる故れる事をも。委細ゐ説明
を給へるが如し。されバ親王はまゝ紀文ゐ漢ぶみを取て。
潤色を加賜をげりし以前ゐも。此説あるしこのゞ假名本ゐ
も已ゐ右の傳ハ有ゐゐ。ゐるゝ。まゝ假名本。全云葦牙と有
をいふゐ足らぬ非訓なりと云れゞ。此をカビヲフヽメリ
とゐ。葦牙ヲとゐ訓しゐて。キザシと訓むハ一傳ゐぞ有々
らし。加毘ゞ訓るゐを。深き由あるて。古史傳ゐ説坐るを見
て悟知るゐ。し。まゐ師説ゐ薄靡を。タナビキテ。淹滞ゐ。レヅ
ミトモリテ。と注せる云ゝ。釋ゐ引とて。片假字ゐ書る物れ

るとあるを。无稽の説とも。何言ぞ。ハ承平私記ゐ。假名日
本記ハ元紀ゐ作るを。師説の如く誤ゐれバ。今ハ皆改て引つ。亦云太奈比支天止云也。
然則此紀見彼等所作也。まゝ師説淹滞二字乎。假名日本記
ゐ。志豆美止ゝ母利天止注也。とゐるゐて。いと正説れるを。
知辨ふべし。又全書ゐ問浮漂之義依古事記。可讀久良介奈
須。太ゝ與倍留事也。而如字被讀如何。師説如古事記可讀然
也。又假名日本記。大和本紀上宮記等意亦全云ゝ今案此處
浮漂之文。已見古事記等所作也。まゝ師説古事記。上宮記。大
和本紀等皆久良介奈須。太ゝ與倍利止云とも。古事記。假名
日本記等皆溟涬之處ゐ久良介奈須多ゝ與比天止注とも

あり。此を按ふるに古本全云葦牙とあるも古本は溟渤而合葦牙とありといふまハ非ばかむそれ浮漂之文已見古事記等所作也至于溟渤雖无古事記等自經籍中新所撰出也とも私記は云る如く古事記に溟渤の字は无きを以て彼例を推て訓せさるを知るべし又釋に引る私記は加ハ三ナビキテ。是借名本之說也公望私記は借名古本全云葦牙まと國常立尊御名誰人始稱又若有所據爲號哉答師說假名日本記。上宮記並謂古書皆有此號但始稱之人无所見上古之間无由據勘とも私記に洲壤何物哉答案假名書云國土也まと齋明天皇紀五年下に伊吉連博德書を引て閏十一月一日とあるを釋紀は私記を引て師說云下十一月兩字可謂衍也今案假名日本記无十月二字此假名日本記者太政殿下御書也博士爲決此疑申給太政殿下と有て藤原忠平公はや有む師說に此を舉て古本ハ已く世はなゞも見ゑて已は上稀なる書れりゝむと論をきさり引さる如く上宮記大倭本紀古事記假名日本記と並引き又假名古本とあるをバいにで引出ぢりけむ思ふは已ゞ妄說の破綻を嫌へる私意はよそ有ら色まと世にいふカナづけせはは云ふ。クサノヒメと訓あと云く。此も私記に師說カヤノヒメ止讀之古事記云鹿屋野姫安氏說草讀如字假名本クサノヒメ止讀之とあれど非訓に非ず記傳に說きし如くカヤとハ屋根を葺草は稱ゆてクサとカヤとは別物はあらぬされゞカヤと申せは狹くクサと申せバ廣く係

きバ。野神ハ坐せむ。又御名を久佐奴比賣神と申むも。もと
くゞ宜ある御稱よあらぬゞや。かくて又釋紀ノ引る古本ハ。
内臣。まさ織甄。田部之戸。三宅國。令返與之越郡司道君。まさ皇華
使。私記曰。作皇都。と有も決めて。假名本あり。とゐる六條ハて。論者ゞ云る如き。世
ハいふ。カナづけせる本よりあら侍。あれ橘經亮も。思惑へること上ハ已く說り。
狩谷望之も。紀の訓點ハ。養老私記ハ昉れりと說るハ。本末を取失ひ故るものぞ。假名日本記。やゞ
て古本ある事を。いと明著をかゝどけ理のゆゑ分明ゝら
ざりゆむと。いと怪きまでよあむ。はさ開題記ノ云る說ハ。
信用しがさ云。と云きど。師說を確乎して。動をべゝらざゝ
事。上件ハ說るゞ如ゝを。あゝゞまハ。ゆゑ云バ。承平私記ハ。

假名本ハ二部有て。其一部を。和漢之字相雜て之を用ひ。其
一部を專假名倭言之類を用ふとあるハて。其記ハ二種ゐ
るゝとハ。論ふべくもあらぬゆ。上ノゐぐゝ如く。全記ハ。ま
さ假名日本記。示云。太奈比支天止云。然則此紀見彼等所作
也。見字釈紀ハ引るハ脫とり。元書ハ。此上ハ旧事紀の事もあれど。彼を僞書あれバ畧きて引ゝ故。といひ。
釋ハ引る私記ハ。古本云古止ゝ多知伎とも。洟案古本云與
太利。云ゝ。故古本云ハ今後作者改作洟字其意相違。然則遠
尋古本。其義不違。若從後本。其說不該。まさ現人之神とある
下ハ私記。借名日本記。可謂帝之號。ゆゑゐるハて。私記ハ謂
ゆる古本。假名本。假名日本記。はさ借名日本記。日本紀ハ謂

ある。舊本も皆全く。和銅七年了。上奏きる記よて。假名漢文宣命書け。入ア交りなる書の狀なりゝむとふ。師說のいと〳〵正說なる。ゑ。ゑき人もよく見て。ゑく考へ辨ふ法し。職官志ゑ。此を紀の草本とせるハ非ル卍。まさ此記の成し起原といへむ。先師も已ゑ說きさる如く。決めて天武天皇九年三月丙戌ゑ天皇の大安殿ゑて。川島皇子等ゑ。御詔科せて。帝紀及上古諸事を記定しむとある時の御記けありて。そハ後ゑ謂ゆる長案。まさ曹案。或ハ草案ともいふ。或ハ後ゑ謂ゆる史料などいふ体裁よて。古記氏文の文けまゝゑ。物せさを賜ひしふこゑよぞ有。々むを。其中ゑり天皇の大御心ゑ正しと思看を限を擇出て稗田ゑ自了。古代ハ天語。まさ語部などハ例のはゝゑ。科せ託て。大御口づゑら誦習せ賜へるぞ。即古事記と成きるゑ多。そハ曹案をきゑる物を。後の御代くゝゑ。ゑく正改め記次ゑせ賜ひて。和銅七年ゑ事終し名給へるぞ。二部ある中の假名日本記ゑぞ有ゑべき。そハ事の始末をよく考へ渉して。必ゆるべき事ゑ悟る法くゑむゑり思合もべハ

古とも。後御代ゑ。續日本紀の草藁をも。四度勅させ賜ひ。新國史も或說ハ如く。寛平御記。天德御記の文を。そハまゝゑ取れる所あり。本朝世記も。玉海まさ貫首秘抄の奥書ゑ據きバ。藤原通憲入道の手ゑ成りし物とも見ゆる物ゝら。今本ゑも史官記ともあれバ。元の草本ゑやさへ思ハる。金葉集なども三度改撰せ賜へるをも。合案ふ法し。さきむ今本ゑ。一書云。一云ともゆるハ。もと家〳〵の纂記戸〳〵氏文どもを博く挙おゝせ賜ゑ法ものゑると。承平私記了。引載。一書。一說或曰。亦曰者。上古之間。好事之家所著古語之書。猶有其數也。撰此書時。雖不盡採用。而亦不能弃。仍所加載也。とも問。假借之書。雖有其數。皆称一書。置於注。とも古語假名之書雖百數十家。皆以勅語爲先者。といひ。弘仁私記序ゑも異端小說。惟力乱神。爲備多聞。莫不該備。とあるも。後本を指てなきど。元書ゑも。傍て心得べきさと。論ふまでもあらゑ。さて揚鳴。曉筆ゑ。日本紀卅卷。元正天皇。御宇了。元ハ假名ゑりしを。と安部安麿と御談合。嵯峨天皇。御宇ゑ。清見原天皇。六人の儒者ゑ勅して。眞名ゑ。おぶつかゝせらるとあるハ。のなきさとれゞら。元も假名ゑ。眞名ゑ改め賜ひ。弘仁御代ゑも。潤刪を加へ給へりと。ふ事も決て傳ある說なるべし。

○因まゝ祢て記おきし物を。此ゝ記し添てむ。吾師翁は
説ゝ。日本紀は後御代ゝを。御改有ゝし由委く論
れさるを。熟案ふゝ。天智天皇。天武天皇。持統天皇は三御
代紀どもの。げゝもゝゝ有ゝし狀は。いとゝゝるき事なゝお
ろ〳〵説てむゝ。まづ今本ハ天智天皇元年をむ。壬戌ゝ
繫て。即大御母齊明天皇崩御の翌年ゝて。大御母命ハ。七年辛酉は七月廿四日崩ましゝき。記せれ
ど。或説ゝも云、る如く。大織冠公傳ゝ。此壬戌を皇太子攝
政元年とし。其七年戊辰を。更ゝ即位元年といひ。興福寺
縁起ゝ。天命開別天皇。即位二年。歳次己巳とゝるは。舊本
日本紀は年紀あるべしと云るハ。實ゝさる説れるを。又

御紀本注ゝる丁卯を。元年とせゝ書も有しれゝそゝ藤
原貞幹が見さゝといふ。醍醐地藏院は古本日本紀首書
ゝる本朝事始ゝ。天智天皇即位二年戊辰十一月行大嘗
まさ日本決釋ゝ。天皇即位二年戊辰十一月廿四日癸卯。
行大嘗祭帝王毎世一度大祭始于此と有ゝ。まさ集古遺文附記ゝ。地
藏院古記引戎記云。天智帝御宇定即位之礼用唐礼服大礼大祭着之云、るを。大嘗祭の此
御代ゝ始れり。といふ事ゝそ妄説ゝ。即位二年大嘗祭
ゝりといふゝゝは。必記の旧本書は傳ゝて。「正説れるゝと。上は事
始ゝ考合せて知べし。ゝゝは已ゞいふまでもゝく。右奴ゞ
説ゝ。まさ仝院古記は中二種あり。一は御系統を始て。古

來異記あるとしを後世に惑ありとて大同に始嵯峨帝の燒捨賜ひし叡斷なかるを奉て書とる和ゑ一を日本決釋ゐ彷彿とる書と相見申候そに古記に或記ゐ云本朝ゐて古よゑ神祇を祭る事を有しが定りとる禮ハ無ゑし を天智天皇天下に礼儀唐土の制を用ひ給ふ即位二年ゐ始ゑて天神を祭ゑて神武天皇を配し給ふ此ぞ大嘗祭の始也と云ゑ然きども大嘗祭ハ神代より興ゑて世くゝ行ひ給ふと國史ゐ見ゑさゑ然るゐユウキに天神を祭りスキゐ地祇を祭るゐとを天武天皇御時始めて世くれ○あれゑとも記せ依由云ゑいとをしとされる

說れゞら或記の方を大かさむこのしくて古れ一を御系統に事を云くとある書を記せるまゑ人の語と聞ゐさて大仝の始云くゝを云るハ誤ゐて此ハ決て延曆天皇に御事なりそを弘仁私記序注に帝王系圖ちふ書を挙て此書云或到新羅高麗為國王或在民間為帝王者因茲延曆年中下符諸國令焚之而今猶在民間也と見ゑ神皇正統記ゐも志ら宜へるまゐとや唐土に制を用ひ坐るを御を見て知るべし

即位に儀禮ゐて此を或人も論ずる如く續紀元明天皇御即位の詔文ゐ

御即位に詔を始ゐて御代くゝに御即位の時に詔文ゐ必是者關母威岐近江大津宮御宇大倭根子天皇乃與天地共長與日月共遠不改常典止立賜比敷賜覇流法乎受被賜坐而行賜事止衆受被賜而云くとあるゐていとを

るきを。大嘗祭ゟ拵て云、るも。いみじき非說ゟて。殊ゑ神武天皇を配祭。賜ふと申をゐどゟ。さも無知說ゟり此も續紀。まさ文德天皇紀ゟる。漢礼もて。皇祖天神を祀賜るさとを。混傳へさる事疑ふく。大嘗祭ゑ唐礼を用ひさせ賜ふ事ゟき由ハ彼儀式等をを見む者も。論は爻とも明著ゟらむものぞ。ユウキゑ天神を云くといふゟ。天武天皇紀をあしく見誤ゑしまて。悠紀主基をもゟ。神代より此御禮ゟるものをや。まさ逸古書ゟ。本朝事始を引て云。仝天皇攝位五年即丙寅年ゟり。詔。天下男女。无老少。皆結髮。天武天皇紀。壬午四月。まさ文武天皇紀慶雲二年十二月條ゟも。此事見も。まさ天皇丁卯年

攝位六年ゟり。五月。以皇太子大友爲太政大臣。ゟさ天皇二年。戊辰正月。以太政大臣大友皇子。立爲皇太子。始稱東宮。此ハ一書の傳ゟから。信ぶさき由ゟりて。下ゟ畧云へり。ゟさ四年庚午正月。以蘇我果安臣。巨勢人臣。紀大人臣三人。爲御史大夫。山田氏ゲ白首猶ゟ。抄ゟ禮儀彙纂ゟ。次釋を引て云。四年庚午正月朔百官始行朝賀之礼。從此爲國例。古本日本紀注云。ゟどあるも。御紀今本ゟ七年春正月丙戌朔戊子三日皇太子即天皇位云。或本云。六年歲次丁卯とゟる丁卯元年歲紀を用ひさるまて。即舊本ゟる一書此傳ゟぞ有べき。右文ゟ攝位五年とゟるも。大職冠公傳ゟるとをく符ひて。此ぞ當世の事實ゟりゝる。ゟさ舊本ゟも。實ゟ七年戊辰を以て天皇元年と爲賜ひけむ事ハ。天武天皇紀ゟ。天命開別天皇元

年立爲東宮。扶桑畧記ハ。七年二月戊寅日。廿三日以大海皇子立皇太子。天武天皇是也。まと愚管抄ハも。天智七年戊辰二月為皇太弟ゝ見ゑ。皇胤紹運録ハも。天智七年戊辰二月為皇太弟ゝいひ。帝王編年記。皇年代記ハも皇太弟と記し。宇治拾遺物語ハ清見原天皇。其時ハも。東宮ハて御座ゐるゝ云く。水鏡ハも。十年と申しゝ正月五日御門の御子ハ。大友皇子と申ゐを。太政大臣ハ為奉賜ひき。東宮ハどハぞ立給ふべゝりしハ。御門の御弟此東宮ハておもしまゐゝりバ。かく成給へりゐハおそとあり。されバ上ハ引る本朝事始ハ。大友皇子立為皇太子ゝ云ふるハ。此ハ混傳へし事知るべく。天智天皇紀三年甲子二月條ハ。大皇弟とあるハ追書し賜へるハおそ。

四年冬十月庚辰。十七日天皇臥病。以痛甚矣とあ。天智天皇紀ハ。十年九月。天皇寢疾不豫。或本八月天皇疾病。庚辰。天皇疾病弥留とて。此辛未歳を十年ハ係らきさるハて知るべし。此天皇攝政七年を以て。天皇の元年として。今本ハ十年ハ四年としさり。皇年代畧記ハ。辛酉年七月。齋明天皇崩ぬ以來。皇太子厚至孝。不称即位。壬戌以來於岡本宮。攝政五箇年。至丙寅と云ゑ。さて水鏡ハ。此年の十月ハぞ。大友太政大臣。東宮ハ立賜ひしと見ゑさる。此正説なるべし。懷風藻ハ。二十三ハて。皇太子と爲賜ひ。崩年二十五とありさて立。さても立太子庚午歳ハ當れバ。一年混ぬる傳れり。されぞ扶桑略記。一代要記ハどハ。天皇元年。壬戌正月三日。即位と有るハ。據ゐき非説ゐゑ。されバ。此天皇を攝政元年を紀元を數ふる傳へと。丁卯年。まと戊戌年を元年とせる一書も有しゐり。次ハ天武天皇紀ハ。元年春三月。壬戌朔。己酉云くと有ぞ。此事どもも。實ハ弘文天皇ゑ。近江朝廷ハての事ハて。是月舍人朴井連雄君。云くと有ゐりぞ。天武天皇ゑ御事實ハ係れぞ。古本ハは決ゑてかゝ。ハ不体裁ハ有まじけれバ。必ゑ此ハを淡海朝ハ係て記されとゑけ

む。弘文天皇の御事ハ、大日本史を始て何
くさと論へる説多けれど、今ハ申さゞ。さて二年癸酉二
月丁巳朔。癸未三日 廿七下り天皇命有司設壇場、即帝位於飛
鳥浄御原宮。皇代記ニ朱雀二年癸酉正月廿六日癸未、天
皇即位、扶桑畧記ニ此を二月廿七日癸未と
し、皇胤紹運録ニハ白鳳二年正月廿六日即位とも、共ニ誤なり。と見
次大梁月踵夾鐘清原大宮昇即天位。大梁ハ酉年、夾鐘ハ二月なり。と見
ゆ。さて是年也大歳癸酉なりて。癸酉年を天皇元年と
建賜へるなり。年中行事秘抄ニ。天皇白鳳元年。四月十四
日。以大來目皇女獻伊世神宮。依合戰願也といひ。此のこと。御紀
の二年四月己巳十四日ハ條ニ見ち。さて編年記皇年代
畧記等ニ。備後國献白雉、仍為瑞、改元白鳳といひ、水鏡ニ
も。此天皇二年癸酉條ニ白鳳と改元あり。十五年壬申し
ニ。大和國ゟ赤雉を献れり。さて朱鳥元年と年號を

かへられきとあれど、御紀ニハ三月壬寅、備後國献白雉、
とのみにて、改元ハ事見ゆ。まさ大和國ゟ赤雉を上
きる事ハ、皇代記、扶桑畧記、吾妻鏡などニも見ゆ。さきど、
釋紀ニハ朱鳥下ニ天皇九年七月朱雀在南門十年七月
朱雀見。兼方按、依此等瑞而改元也と云へるハ、彼説をおも
つゝなく思へるなり。白鳳元年ニ水鏡畧記、皇代暦、春秋
暦畧等ニ壬申ゟかけ、或ハ元年壬申、信濃國献赤鳥、為瑞、
改元と、皇年代記、皇代暦、活版水鏡ニ記せるハ、朱鳥の事
を混傳へしなぞ有ぬき。一代要記ニ太宰府献三足朱雀、
即白鳳元年也とあるハ、論ニも足らぬ非ゝ。さて白鳳ハ
十三年なて、元年癸酉、朱鳥ハ
年ゟて、元年ハ丙戌なるべし。まさ藥師寺縁起ニ。天武
天皇即位八年庚辰十一月皇后不念巫醫不驗云ゝ仝寺塔
露盤銘文なも。舍人親王の御書と申傳ふ。維清原宮馭宇天皇即位八
年庚辰之歳建子之月以中宮不念云ゝと記賜ふ。牙るなて
知らぬ。今本ニハ九年ニ係て十一月癸未日皇后
體不豫則為皇后誓願初興藥師寺とあり。仝

親王の御撰なりいる相違(カヒ)ある有るべきものゝハ。大日本史。まさ日下部勝皐も。已ゐ此説あり。合見(セ)べし。次ゐ持統天皇も。元年を丁亥ゝ係て。但し大歳丁亥ともあれど。攝政の御代よも。大嘗をゞ行ハせ賜ふ例と聞ゆさり。神功皇大后紀よも。ちゝ有。よて知(ル)べし。記されさきども。實た朱鳥元年を以て。攝政元年と爲(サダメ)賜ひて。朱鳥年號を猶用させ賜へゞと聞ゆ。類聚國史ふた。持統天皇。朱鳥元年。十一月丁酉朔壬子。奉(ツレ)伊勢神祠。皇女大來。還至(テ)京師(ニ)とあゞ。今本ゐハ。その翌年を元年とせるハ。大嘗祭聞看を年を以て。元年とせる本ゐ依(ラ)れしゝ。まさ朱鳥元年九月丙午。昭天淳中原瀛眞人天皇崩。皇后臨(ノ)朝稱(スル)制(ヲ)とあれむ。やゞて攝政と申奉るべきなり。さて旧本ゐハ丁亥年を也。二年とありし証ハ。今本三年己丑（実ハ朱雀五月詔ゐ太政官卿等奉宣。二年遣田中朝臣法麿等相告大行天皇喪云々とあるを。天皇元年正月甲申十九條ゐた使直廣肆田中朝臣法麿呂與追大貳守君苅田等遣於新羅赴天皇喪とあるゐて知るべし。ゝく全巻ゐ前後違ゐるた。後人の筆削ある事いと明白ゝり。那須國造碑文ゐ。朱鳥四年己丑と見ゆさるも又証ときべしさて靈異記ゐ。朱鳥七年壬辰。二月とあゐ狩谷望之が考証ゐ。持統天皇六年也。紀朱鳥之號唯一年而已。與此異。万葉集左注引紀云。朱鳥四年庚寅。朱鳥五年辛卯。朱鳥六年壬辰。朱鳥七年癸巳。皆與此差一年。巻三。大津皇子被死之時云々右藤原宮。朱鳥元年冬十月。按皇子賜(ス)死。朱鳥元年丙戌也。與此及紀合。とあるたさゐ説ゐて。紀ゝ古く國史ゝ如く。丁亥年を以て朱鳥二年とせる本と。又朱鳥元年と爲(セ)る本と有しなるべきを。丁亥年ゐ以て。朱鳥元年ゐ係さる

ていみじき誤あり。皇年代記よりも。丁亥を朱鳥二年に係て。九年乙未より大化と改元ある由記せり。實ハ今本四年庚寅。正月戊寅朔。云〻皇后即天皇位とあれど。此よりぞ正く元年とて定賜ひけむ。皇代記に。五年朱鳥五庚寅正月一日。戊寅即位。紹運録に。天皇治十一年。朱雀五年。正月即位と見ゆ。仝六年朱鳥七年十一月戊辰。朔辛卯。廿四日大嘗神祇伯中臣朝臣大島。讀天神壽詞。壬辰。廿五日賜公卿食禄。乙未。廿八日饗公卿以下至主典。並賜絹等。各有差。丁酉。廿日饗神祇官長上以下。至神部等。及供奉播磨國因幡國郡司以下。至百姓男女。並賜絹等。各有差。とあるを。謂ゆる國司ハ仕奉まる大嘗ゆて。皇代記にも。六年辛卯。十一月大嘗會。扶桑畧記に。因幡播磨供奉其事。餘を仝し。始授位記と

あきバあゆ。此年まで大嘗を延行せ賜へるハ。故ある事れるべし。さきバ。丁亥元年ゆ。大歳とあゆも。おゆ故ゆあきたゝちをけれど上ふ云〻る如く。此攝政元年より。此大御代ゆを。朱鳥元年をりて。數ふゆ年立を。攝政元年をゆと。即位元年よりと三ゆゆとせむゆ。そをとまれかくゆき。三御代をもよ。かく異仝ゆるを。舊本ゆハ元書より取くゆ記せるを。其まゝふ取られけむを。今紀を御撰修の時より。此を改賜ゆるも有ぬべく。又後くハ御代ゆ文人等ハ潤刪ゆどせゆ時ゆ。謬きるも有ぬべくて。諺ゆ頭隠して。尻隠さぞをいふ如き。鏤漏ゆ多ゆるを。いとあゆ更口をしきや。ちても。師大人ハ

說の。いよゝ正く確(タシカ)なるおとを。知るべくおむ。

△因云。古史ト云物ヲ撰ビテ。ソノ傳ヲカケリトカ。古史ト云モノ。先古事記ノ体裁ニテ。古事記ヨリモ正シク。上ニ立ムトスルニヤ。抑我皇国ノ古代ヲ記セル。皆勅撰ニテ國史ヲ撰バルヽ。必第一大臣執行。參議一人。大外記竝儒士之中擇堪筆削者一人令制作之。云くトアリテ。モトヨリ甚オモキ事ナリ。後世童蒙ニ示シ。或ハ國史畧ノ如キ。歴代ヲアラマシ通覽セムタメノ物ハ別段ニ。近代ニテハ。水戸西山公ノ大日本史コソ。國史ト云ベキ物ニテ。勅撰ニハアラザレド。ソレモ若。朝廷ニオイテ。國史撰

命セラルヽモアラバ。其時ノ爲ニ廣ク諸書ヲ輯メシルシ置ヨシ。序ニ見エタリ。サルヲ私ニ神代ノ初ヨリ。天孫降臨ノ。掛巻モ畏キ古傳ヲ撰ミ記スヿ。實ニオフケナク。皇国ノ古傳ヲワタクシ物ニスルヿ。カシコシトモ恐シ。大成經ノ如クハ非ズトモ。罪ウベクナム。アナカシコ。

○今辨云。此ハ開題記ヨ。已く出されさる新儀式の文あるを。珍げよ引るゑ何事ぞ。此ふハ大臣執行とれみ(ゐ)ぬき堂。ぶみ唐書百官志ヨ。貞觀以後。多以宰相監修國史。遂成故事。とあるも。ちく似さるおやなり。上代ゐゑ。史ゝる重き御大事ふゑ。必親王等れ總裁と坐し事ハ。上宮太子れ御撰有し天皇記。國記等ゑ。更ゐて。上ろ舉さる。天武天

皇は古記の御撰定を始させ賜ふまも。川島皇子忍壁皇子を始。諸王等は第一に預賜ひ。日本紀は。舍人親王。姓氏録は。万多親王。律令は。邢部親王は總裁と成らせ賜ふて知る所しざる重き事とは。飽まで知られ給へも。神隨おほ大道はかと〳〵地に墮むとをる手を袖にかつゝ。坐視ふ忍びあへぬて。天皇祖神は大自詔賜ひ。御傳へ坐せる。天津詔詞はいと正き御古事あるを。やく多志ふ悟知られて。記紀二典にも混説は少らず。凡て諸説の多る中ふて正説は必ず一説に歸べく。まとそは他は姓氏録。風土記類を始色て。論者の謂ある。勅撰は諸書ふも。遺聞逸事の多る事をし遺くまゝ。拾取て。博く深く。網羅蒐輯て。惟神ある古道を。再とび。世に明白くせられしは畏々きども。天皇祖神ふも。遠神祖とまは天皇等ふも。いとめ〳〵忠孝に仕奉らきしはとの至極れるを。かは近く伊勢大御神は。神朝廷は御盛を。おぬびに奪奉らむと謀きる。奸僧にしも比云るを。偽をふ欺きてをふ。いやも比倫を知らぬ。白痴とは云ふべ〳〵き。已は。紀文を。古傳ふを支事を。漢めらしく。理深げに記添とる事と上り說るは。比おき無禮詞とも知らばや。此古そまと勅定ならで。神代皇代の事おふけなく恐きにざれ。を記そはとを罪人とせむ。論者は云る。大日本史の作者は更ふて。近世にはいやく多く。古くは神別記。皇代記。一代

要記。水鏡。北畠准后は元〻集。神皇正統記。まと歴代皇紀な
ど。私ふ著されさる物を。擧て數へも盡し元ぬぞうしぞた
姑く舍て。古學は祖ゐる。鈴屋翁は記傳。及髻華山蔭ろ。日本
紀の誤を正ちきて。言立て。別記と立賜へるが如き古事記
をおよなな底寶と持い居ろれしも。神代正語を。記さきさ
ゐも。論者た。此を罪人ゆせ法ふや。いをゞ正語ハ。先師の古
史成文は疎きふみ。成文を。神代正語の委き物とも云ゆき
を。此のこ殘難色て。彼をバ知らぬがゐみ。さし措ゐた。諺ま
云。鹿を逐ふ者は。山を見ざる類とこのせむ。かゝる道理もつ
ゐ知らぬて。是非邪正は論をむゆを法ハ。それぞおふけれ

紀耳ゐひが。音律を判ア。瞽者が彩色を評し。鷦鷯は鵬鳥を
嘲り。精衛とういふが大海を塡むとをある喩と侔く。いを
片腹痛きをのゝ。それ胆太きまおそ畏べゐ色れまが云ま
ゐしたふした。いと多ゐれど。ゐゐかきつむべきもは。
いとさをまて。心いらきのせらるゝふ合せて。我が大人神
靈は天翔り故。おどかくおゆれげおきアざお。のこら日
ゐぎを孔ぎうつやゆ。見そおをはむも。さをゞゐ心ゆゐれ
む。姑く筆を閣くおれむ。

明治八年五月八日

懲狂人下卷終

附記

されふみをかき終(よゝ)をて後ゝ。後氣吹廼舎翁ちゆ。故大人ゝ既ゝ。疑字編をも記終られし後ゝ。得賜ゝる物とて。示(ミ)せられさるを此ゝ記し侍る。

ナムムヰウミウタウフフ未詳

此ハ安房國。安房郡大綱村。大巖院地内ヨリ堀出タル。石塔ニ彫付タル文字ナリ。此寺ハ西行上人ノ開基セル也トゾ。玄道云。此ゝハうくあれど。屋代氏ゞ。五月廿五日の書ゝ。西行寺と一里ゆど隔候。大巖寺と申を浄家ゝ庭ゝ。四面碑ゝて御座候。外三面ハ。諸体ゝて。六字名號の由。文政元年四月。然ゝ上ハやもり念佛ゝて可有之候と見ゆ。

コヲ其石ニ摺リテ屋代翁ガリ鑒定ニオコセタルヲ翁ノ手ヅカラ摸シオカレシマヽニ竹内健雄ニ再摸セシメタルヽ年号モ何モ無リシト翁ノ語ヽ試ニ音譯ハナシタレド何ノ義ト云コト詳ナラズ佛語メキタリ

文政四年三月

平篤胤

右依祖父君之命寫之于時天保九年戊戌九月平田延麻呂

まゝ尾張國熱田神宮ある海藏門ゟ外ゟ昔庚申社ありし跡ゟ掘出つる猿ゟ似さる文字の如き物も有れど詳れら紙ハ記出ぐ今ハ昔見つる陸奥國會津日月社地本山麓大神近江正高道ちふ人ゟ出雲大社ゟ詣る因ゟ九州

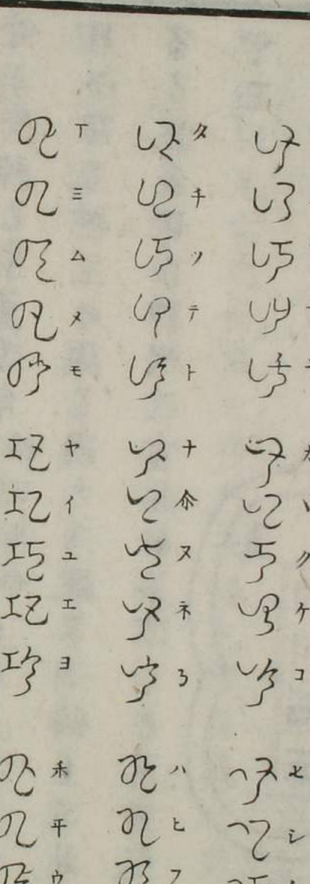
邊まで見巡きる手記ゟ飯石郡信下村一宮三刀屋神社ゟ條ゟ祭神ゟ素盞嗚命大己貴命稲田姫命あゟとて天保七年九月三日ゟ詣て神主の許ゟ因て内殿ゟ伺候して此寶物を拜奉るゟ誠ゟ奇き神代ゟ古物れる品しと思ゟむ貴事限ゟし

ゟて

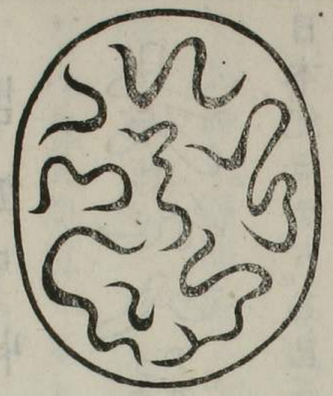
稲田姫命ハ鏡

内笑ひ鏡の圖

かく有ルを。此八字を宮ゲも眞字ふやとおがしゝまバ序ふ
ゐむ
はさ參河國ゆる。羽田野氏をもおちせられとるをも。
出雲國日御崎神庫ニ所傳



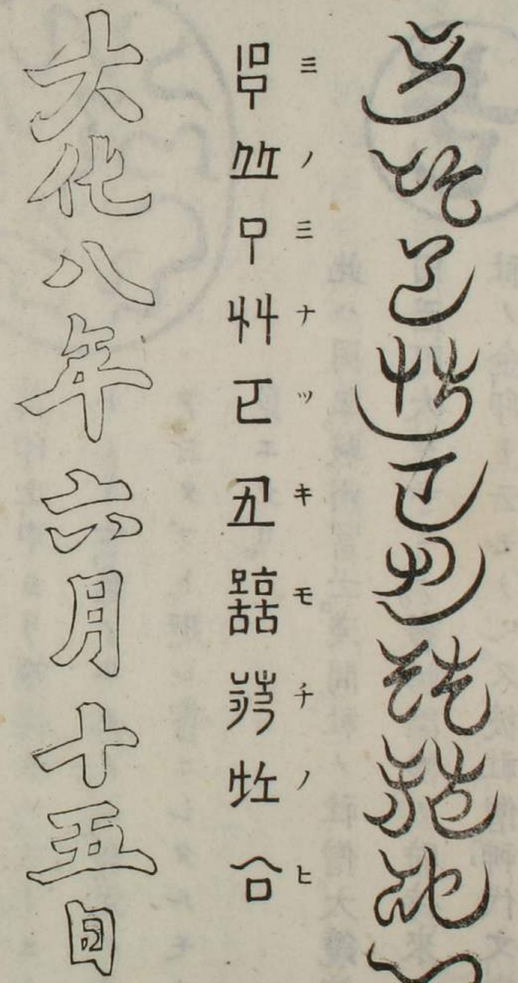
右岡部春平ノ茶記贅言ニ所載也



マタ文久元年辛酉春。伊勢松坂人。木谷藤兵衛ガ持來テ見セタルヲ寫ス。其印土中ヨリ掘得タルモノニテ。イト〳〵古色アルモノゝ。印文ハナムアミタブト。廻シ書ニシタルモノト見エタリ。

此ハ同年。駿州富士。淺間社ノ社僧。大鏡坊吉田西町大聖寺ニテ。寶物開帳ノ時持來レル社ノ金印ト云モノゝ。又彼社僧。神代文字行艸体ト云。一枚スリノ物アレドイカヾ有ム。

まゝ野之口隆正秘藏大化年中神字。古太皷之置上銘。



日本紀ニテハ。乙巳ハ孝德帝ノ大化元年ナレバ。是ゾ異說區〻〻。舒明帝ノ命長六年トスルモノアリ。法隆寺緣起ニテハ。丙午ヲ大化元年ト記セリ。又大化ヲ天武持統ノ年号トスルモノアリ。逸号年表ヲ見テ知ベシ。此太皷ヲ証トシテ云時ハ。舒明帝ノ十年ニ建サセ玉ヘル。大化ノ年号ヲ。孝德帝其マヽニ用ヒ玉ヒシモノナラム。其始ハ内〻ノ事ニテ。此天皇即位シ玉ヒテ。其年号ヲ表ニ立玉ヘルモノナランカト。法隆寺邊ニテハ。ソノ披露ノオソカリシニヨリ緣起ニハ。一年オクレテ記サレケン。年号ヲモ其初ハ。唐土ニ習ヒテ立給ヘルバカリニテ。今ノ如クキハ〳〵シキ物ニテハアラザリケムトゾ思ハルヽ。

嘉永二年己酉二月　野之口隆正記ス

マタ伊勢人。川北圓靈ノ。伊豆母延美多麻印本ト云物ニ。上代
阿奈文字之圖ト云ヲ出シテ。此文字出雲國造。出雲臣國重
ノ後裔。出雲臣國重ヨリ傳ヘシト云テ。鶴峯ノ神代文字考
ニトレル字ヲ舉タリ。出雲風土記ニ。五百津鉏。神鉏所取(トリトラシテ)〻
造天下穴(アナ)町大己貴命。トアリト云テ。其穴町ノ形ハ[illegible]ノ如
シ。此形ヲモテアナモチヲ造リ云〻ト云リ。又今ノヒラカ
ナノ字モ神(カミ)字(ナ)ニヨリテ造リシモノ〻ヒイヘリ。本書ヲ可
考。トモ記シテオコセラレシヲ。中ニハイカニゾヤ。カタブ
カルヽモアレド。此ニカキソヘツルナリ。

懲狂人附記終

平玄道重識

明治廿二年十二月八日出版
仝　年十二月十日御届

正價金三拾七錢五厘

著述人　玄道相續人　矢野幸男　伊豫國喜多郡阿藏村十二番戸

發行兼出版人　石丸忠胤　東京市神田區佐柄木町廿一番地

發行所　玄同舍　東京市神田區佐柄木町廿一番地

賣弘

京都御幸町姉小路上ル　藤井孫兵衛
仝　室町通御池下ル　池村久兵衛
仝　寺町通四條上ル　田中治兵衛
大坂心齋橋博勞町角　岡田茂兵衛
仝　心齋橋筋安土町南ヘ入　鹿田静七
仝　心齋橋北久太郎町　柳原喜兵衛
尾張名古屋本町通七丁目　片野東四郎
東京日本橋通一丁目　北畠茂兵衛
仝　淺草廣小路　淺倉久兵衛
仝　小石川區大門町　青山清吉
仝　京橋區南傳馬町二丁目　吉川半七
仝　昌平橋外明神下　別所平七

書肆

矢野玄道先生著

懲狂人　全二冊

明治廿二年
十二月新鐫　玄同舍藏梓